

TICADを超えて 日本のアフリカ外交のエクリチュールを考える (特集1 TICAD IVの課題)

著者	落合 雄彦
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アフリカレポート
発行年	2008-03
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00008129

TICADを超えて

－ 日本のアフリカ外交のエクリチュールを考える －

落合雄彦

1. 空前だが絶後ではない国際会議

「今東京はアフリカ一色」と言ったら言い過ぎか。(略)東京では、アフリカ文化などを紹介するアフリカ・ウィークと並行して、5、6の両日『アフリカ開発会議』が開かれる。アフリカの自立と開発を話し合うこの国際会議には、約80の国や国際機関の代表約500人が集まる。日本政府が提唱し、東京でこれだけ大規模な国際会議が開かれるのは初めてという。外務省の担当者の一人は『絶後とは言わないが、空前の出来事』と自賛する。(『読売新聞』1993年10月4日付朝刊)

ここに引用した文章は、1993年10月にアフリカ開発会議(TICAD)が初めて東京で開催された際の新聞コラムの一部抜粋である。そして、そのなかではからずも予言的に語られていたとおり、このTICADという国際会議は、たしかに「空前の出来事」にはなったものの、けっして「絶後」のものとはならず、その後むしろ規模をいっそう拡大させながら5年ごとに定期的で開催されるよ

うになった。具体的には、第2回会議が1998年10月、第3回会議が2003年9・10月にそれぞれ東京で開催され、特に後者は89カ国と47の国際機関などから1000名以上の参加者を得た「我が国の外交史上類を見ない大規模な国際会議」(外務省ホームページ)となった。そして、同会議の開催から数えて5年目に当たる2008年、第4回会議が5月末に横浜で開催されることになっている。

ところで、これまで筆者はいくつかの機会をとらえてTICADに関する持論を展開してきた。たとえば、いまから7年前、筆者はある新聞への投稿のなかで「第3回アフリカ開発会議を成功させた上で、それを最後のTICADとすべきである」と主張した。また昨年、やはり新聞投書のなかで「日本は第4回アフリカ開発会議を成功裏に終わらせるとともに、従来のTICADの枠組みを超えた、より積極的な対アフリカ関係構築を模索すべき時期を迎えている」と論じた。

そうしたこれまでの筆者の主張には大きく分けて二つのポイントがあったと思う。ひとつは、直

近に迫ったTICADが成功することへの期待であり、もうひとつは、にもかかわらず、より積極的な対アフリカ関係構築のためにTICADを発展的に解消すべしとする主張にほかならない。

本稿では以下、そうした二つのポイントのうち特に後者、すなわちTICADの発展的解消に焦点を当て、その必要性に関する筆者なりの見解を詳らかに論じることにしたい。

2. 歴史的役割の終焉

TICADは、もともと日本政府が1991年に国連の場で提案し、一貫して主導してきたアフリカ開発に関する国際会議である。

冷戦体制崩壊直後の1990年代前半、欧米諸国では旧ソ連・東欧諸国への関心が高まる一方で、アフリカ支援への関心は総じて低迷していた。たとえば、TICADの第1回会議に出席したアメリカのムース国務次官補(アフリカ担当、当時)は、日本人記者のインタビューに応じて「今後の同地域への援助予算は減額になるだろう」と語っていたし、イギリスのチャーカー海外開発担当相(当時)も「英国の財政はかなり苦しく、アフリカ援助を増やすわけにはいかない」と述べていた(『日本経済新聞』1993年10月9日付朝刊)。TICADが始動した1990年代前半とは、まさにそうしたアフリカへの「援助疲れ」の時期だったのであり、だからこそ、アフリカ開発をテーマにした新しい国際会議を開催するという日本の提案は、その当時、斬新かつ積極的な外交イニシアティブとして注目された。

しかし、第1回会議から15年を経た今日、TICADは当初の精彩を失いつつある。欧米諸国がかつての「援助疲れ」から脱却してアフリカ支援を軒並み増大させ、中国が投資・貿易・援助などの諸分野で対アフリカ関係強化を積極的に推進

しつつあるのに対して、日本のアフリカ支援の目玉であるはずのTICADは、会議の定期的開催、共同文書の取りまとめ、若干のフォローアップ事業の展開、などを除けば、これまで目立った具体的な成果をほとんどあげてこられなかったからだ。

たしかにTICADは、前述のとおり回を重ねるごとに規模が拡大し、それに伴って国際会議としての知名度や盛況さも増してきたといえる。公式行事以外のサイド・イベントも含めれば、おそらく第4回会議は前回以上に華やかなものとなるだろうし、その意味で2008年5月の横浜はまさに「アフリカ一色」に染まるにちがいない。

しかし、そうした国際会議としての華やかさとは裏腹に、今回の横浜会議でもまた、少なくとも前年夏までに公表された会議関連資料などを見る限りでは、アフリカ開発をめぐる実質的な成果の達成はあまり期待できそうにない。

もちろん、「政策指向や思惑を異にするアフリカ元首を集めた会議で、アフリカ内部ですら困難な合意の形成を目指したら、そもそもTICADは開催できない」(平野[2004])にちがいない。そして、それがゆえにTICADは、何か具体策を決議するための会議ではなく、あくまでアフリカ開発をめぐる理念や政策について意見交換をする「政策フォーラム」として位置づけられてきたのである。

しかし、「政策フォーラム」の定義にもよるだろうが、たとえば第2回会議にオブザーバー参加した尾関[1999]が「TICADⅡはフォーラムとしての成功をおさめただろうか。答えはNOである」と明言しているとおり、そもそもTICADは「政策フォーラム」としてさえ十分に機能してこなかったのではなからうか。むしろTICADは、「政策(を議論するための)フォーラム」というよりも「政策(に関わる者を集めた)フェスタ」あるいは「政策(に関わる者が交流する)マーケットプレイス

(市場)」^{†1}といった色彩を部分的に帯びてきたのであり、その傾向は規模の拡大とともに近年特に顕著になりつつある。

それでもアフリカ悲観論が国際社会に蔓延していた1990年代であれば、日本がアフリカ開発に関する新しい国際会議を開催するということが自体がそれなりに大きなインパクトをもち得た。その意味で、当初のTICADはアフリカ支援への国際社会の関心と呼び戻すという重要な歴史的役割を果たしたと評価できよう。しかしいまや欧米のドナー諸国がアフリカという国際援助の「主戦場」に本格的に復帰し、また中国のような新興ドナーがそこに新たに「参戦」してくるなかで、日本は、外見は華やかだが内実に乏しいTICAD、より厳密に言えば、外見が華やかになればなるほどその内実の乏しさがいっそう問われてしまうTICADを今後いかに展開していくべきか、という厄介な課題に直面しつつある。

3. アフリカ外交のエクリチュール

ところが、少なくとも外務省の公式見解をみる限りでは、TICADに対する評価は前述の筆者のそれとは大きく異なっている。

たとえば、外務省のホームページによれば、第3回会議は「アフリカ開発問題を扱う世界最大級の政策フォーラムとして役割を果たすことに成

功」したと高く評価されている。また、同会議の成功によってTICADは「アフリカ開発問題についての主要な国際的プラットフォームとしての地位を確立し、参加各国・機関はTICADプロセスが今後も継続することを当然のこととして受け止めるに至った」とされる。

さらに、第3回会議のフォローアップ事業として2004年11月に東京で開催されたTICADアジア・アフリカ貿易投資会議についても、外務省は、同会議が「TICADプロセスにおける初めての分野別の大規模会議」として大きな成功を収めたと主張する。すなわち、同会議は「TICADプロセスをより制度化した形で継続していくという方針を具体化する実質的な試みとして、アフリカ、アジアの官民双方の参加者から高い評価を受けた」とされ、また、同会議に当初の予想を上回る700名以上の参加者があり、しかもそのなかに複数のアフリカ首脳や閣僚が含まれていたことをもって、外務省は「TICADがいかにアフリカに根づき、高い評価を受けているかの証左」であると自負する。

こうした外務省の自賛的なTICAD評価を「外交の一面とは本来そういうもの」と諦観してみたり、詭弁や修辭として片づけてみたりすることはたやすいが、おそらくそれは正しいとらえ方ではない。むしろそうした同省のTICAD評価には、必ずしも「詭弁法」(ソフィストリ)や「修辭法」(レトリック)には還元することができない、日本のアフリカ外交の「書法」(エクリチュール)のようなものがあるのではないかと、筆者は考えている。

エクリチュール(écriture)とは、書く(écrire)というフランス語の動詞に対応する名詞であり、一般的には書かれたもの、書くこと、書き方(書法)などを意味する(林[1999])。バルト[1999]によれば、作家には、自分で自由に選択できるが、一度選ぶとそれによって逆に作家自身が規制されて

†1 2003年12月にワシントンD.C.で開催された会合の席上、外務省の河野雅治アフリカ審議官(当時)は、第3回会議について「TICAD本会議自体は一面では演説大会といった側面もある」としながらも、「アフリカを共通項として議場の内外に無数の意見交換を行うといういわばアフリカ開発関連の『マーケットプレイス(市場)』のようなものであった」と語っている(ワシントンD.C.開発フォーラムホームページ)。

しまうような形式的現実、書法、あるいはより平易な言い方をすれば「言葉づかい」ともいうべきものがあり、それがエクリチュールとされる。たとえば、ある17歳の少女が文筆をするとき、彼女には、絵文字入りのケータイ・メールのような「いまだき女子高生のエクリチュール」を選ぶこともできれば、「ちょっと大人の女性のエクリチュール」を選ぶこともできる。しかしここで重要なのは、彼女がどちらのエクリチュールを選ぶにせよ、一度選んでしまうと少なくともそれを変更するまでの間、彼女の文筆はそのエクリチュールによって規制され続ける、という点にある。主体はエクリチュールを選ぶ自由をもつが、それはあくまでも最初のときだけであって、あとはエクリチュールの方が逆に主体を規制するようになる。

そして、管見によれば、そうしたエクリチュールに相当するようなものが実は日本のアフリカ外交にもある。それを一言で表現することは難しいが、少なくともその特徴のひとつを、前述した外務省のTICAD評価の語りから紡ぎ出すことはできるかもしれない。すなわち、外務省のTICAD評価では、たとえば前述のとおり「我が国の外交史上類を見ない大規模な国際会議」(第3回会議)の開催という形式的成果がアフリカ開発や支援の実質的成果のごとくに語られる。また、同会議での提案を具現化するために貿易投資会議という別の大規模国際会議が開催され、そこでもまたその開催や規模といった形式があたかも実質として評価されている。このように形式を重視し、それをもって実質とする語りや思考こそが日本のアフリカ外交にみられるエクリチュールのひとつの大きな特徴といえる。そして、筆者がTICADの発展的解消を唱えるのは、あたかも作家によって選ばれたはずのエクリチュールが逆に作家自身を規制してしまうように、TICADをめぐるエクリチュールが

日本のアフリカ外交自体を逆に規制してきたのではないか、という認識があるからにほかならない。

むすび

しかしながら、日本政府は第3回会議を契機にTICADの「制度化」の方向性をすでに打ち出しており、おそらく同会議は今後とも継続的に開催されることになるだろう。その意味では、TICADの発展的解消という筆者の主張はもはや完全に昔話にすぎない。

にもかかわらず、筆者が本稿においてその昔話をあえて再び語ったのは、今日進められているTICADの「制度化」なるものが、むしろ「継続化」という形式を重視し、それをあたかも実質として語ろうとする類の従来外交エクリチュールの産物であって、必ずしもアフリカ開発を明確に志向した「実質化」の試みではないのではないか、というごく一抹の懐疑の念があるからだ。

今後のTICADがそうした筆者のわずかばかりの疑念を完全に払拭するものになるのかどうか、いまはまだ横浜会議の趨勢に注目したい。

【参考文献】

- 尾関葉子 [1999] 「TICAD II に期待されたもの」(『アフリカレポート』No.28) pp.6-9。
 外務省ホームページ (<http://www.mofa.go.jp> 2007年12月17日閲覧)。
 林好雄訳註 [1999] (ロラン・バルト 『エクリチュールの零度』 ちくま学芸文庫、筑摩書房) pp.123-229。
 バルト、ロラン [1999] (森本和夫・林好雄訳註) 『エクリチュールの零度』 (ちくま学芸文庫) 筑摩書房。
 平野克己 [2004] 「TICAD III と TICAD イニシアティブ」(『アフリカレポート』No.38) pp.3-7。
 ワシントンD.C.開発フォーラムホームページ (<http://www.devforum.jp> 2007年12月17日閲覧)。

(おちあい・たけひこ / 龍谷大学法学部)